

主 題：パウロの同労者たち

聖書箇所：ローマ人への手紙 16章1-16節

ローマ人への手紙の最後の章になります。今日は16章の1-16節を見ます。ここにはパウロの同労者たちへの挨拶とローマの教会への挨拶とが記されています。恐らく、これらの名前は余り耳にしない名前かと思いますが、パウロとともに働いた、また、パウロが非常に愛した信仰者たちの名前がここに書かれています。ごいっしょにみことばを見ていきましょう。

A. 同労者たちへの挨拶

1-16節には27名の名前が出て来ます。

1. フィベ 1-2節

その一番初めに上がっているのがフィベという一人の女性の名です。

1) 推薦

1節をご覧ください。「ケンクレヤにある教会の執事で、私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦します。」とあります。ローマの教会に対してパウロはこの人物を推薦すると言います。その理由をこの後見ていきます。

(1) 名前の意味：聡明、輝いているという意味のある名前です。パウロはこの女性がまさにこの名前にふさわしい素晴らしい信仰者であることを神に感謝するのです。なぜ、彼女は聡明であったのか、なぜ、彼女がクリスチャンとして輝いていたのか？答えは簡単です。素晴らしい信仰者だったからです。彼女はみことばに従い御霊に満たされながら歩んでいました。皆さんもよくご存じのように、私たち信仰者はみことばを学びその正しいみことばにしっかり従うことなしに、私たちの信仰は成長しません。私たちはインスタントラーメンの時代に生まれた者として、3分間で食べるものが目の前に整うようにと願いますが、信仰はそうではありません。長い時間が掛かります。日々、神とともに歩むことによって、主が与えてくださるみことばをしっかりと学び、それに従っていくことによって、もちろん、神の備えてくださる助けを得てそれを実践することによって私たちの信仰は成長します。彼女の信仰はそうにして成長していたのです。そして、私たちを変え続けてくださる聖霊なる神に自らをゆだねて生きることによって、主はそのような素晴らしいみわざを為してくださるのです。だから、彼女は「聡明、輝いている」という名にふさわしい偉大な信仰者であり、霊的リーダーだったのです。

(2) その働き：彼女がどのような働きをしていたのか、パウロは教えます。

・「執事」＝「ケンクレヤにある教会の執事で」とあります。ケンクレヤは現存しているギリシャの町です。バルカン半島の南に小さなペロポネソス半島がありますが、そこにある大きな町がコリントです。コリントには西に通じる港と東に通じる港の二つの港があり、このケンクレヤは東の港と呼ばれていた港です。ですから、ここからは地中海の東部に向かって人々は出かけて行ったのです。コリントからおよそ14キロ東に行ったところにあると言われています。一方、西の港はレカエウムと言い、ここからはローマを初め、地中海の西側に向かって人々は旅をしたのです。レカエウムはコリントの町から約3キロのところにあります。

さて、このケンクレヤに教会があり、その教会においてフィベは大切な働きをしていたということがパウロによって記されています。「執事」ということばの元々の意味は「仕える」です。だから、パウロはフィベは教会にあってもそれ以外でも、まさに、神に仕え人に仕える人物だったと言うのです。

それは私たちクリスチャンです。問題は、この教会にいる時間よりも外にいる時間の方が大切だということです。私たちは神によっているいろいろなところに遣わされているからです。どこにあっても、24時間365日、神に仕え人に仕える者として生まれ変わり生かされています。彼女はそのような生き方をしていたのです。確かに、執事としてそのように仕えていたのですが、パウロはその働きの中でも「教会」ということをクローズアップしています。だから、パウロが敢えて「**教会の執事**」と言ったのは、特に、教会において彼女は大いに用いられていたと強調しているのです。婦人の執事として彼女は教会にあって素晴らしい働きを為していました。

・「**助ける**」＝彼女はどのような働きをしていたのか？2節を見てください。「どうぞ、聖徒にふさわしいしかたで、主にあってこの人を歓迎し、あなたがたの助けを必要とすることは、どんなことでも助けてあげてください。この人は、多くの人を助け、また私自身をも助けてくれた人です。」、ここで使われている「助ける」ということばは非常に興味深いことばです。これは「援助者、保護者」という意味ですが、さらに調べるとこのことばには「指導する、指導者である、寄付をする、寄贈する」という意味があります。ダグラス・モーという神学者は「恐らく、彼女は裕福な女性実業家であって、彼女の富を教会や宣教師への援助に用いていたのだろう。」と言っています。というのは、ここにパウロ自身を助け、また、多くの人を助けた、援助した、支援したと書かれているからです。それだけの財力があったのです。彼女は神から託された富を神のために用いようとしたのです。そのことをパウロはここで私たちに教えるのです。もちろん、教会にあって教会外にあって彼女も他の霊的な人たちと同じように、病氣の人を助け励まし、貧しい人たちを助けたり、旅人をもてなすという働きをしていたことは間違いありません。

もう一つ付け加えるなら、テトス2章に記されているように、彼女は自分よりも若い姉妹たちに対して素晴らしい信仰の模範を示し、彼女たちの信仰が成長して行くように励ましを与え、教えを与えていたことも間違いありません。なぜなら、テトス2：3-5で教えるように、霊的な婦人たちはそのような働きをする人たちだからです。「同じように、年をとった婦人たちには、神に仕えている者らしく敬虔にふるまい、悪口を言わず、大酒のとりこにならず、良いことを教える者であるように。:4 そうすれば、彼女たちは、若い婦人たちに向かって、夫を愛し、子どもを愛し、:5 慎み深く、貞潔で、家事に励み、優しく、自分の夫に従順であるようにと、さすことができるのです。それは、神のことばがそしられるようなことのないためです。」

みことばをもって後に続く人たちを励ます、自らの模範だけでなく、みことばをもって彼らを教えていく、それが婦人執事にふさわしい条件だと教えます。まさに、そのような歩みをしていた人物でした。

ですから、フィベは教会にあって素晴らしい霊的な女性として主によって大いに用いられた人でした。

彼女は「主を愛し、主に忠実なしもべ」であったと、私たちは見ることができます。

## 2) 歓迎を願う 2節

さて、パウロはこのフィベをローマの教会に推薦します。ぜひ、彼女を歓迎して欲しいとパウロは願うのです。そのことが2節に記されています。「**主にあってこの人を歓迎し**」とあるので、彼女はローマの教会に出て行ったのです。このローマ人への手紙の学びを始めた時、この手紙はだれかがローマの教会へ届ける必要があったことを見ました。その届けた人こそこのフィベだったのです。彼女はこの手紙をもってローマへと出かけて行くのです。そして、先ほど見たように、レカエウムというコリントの西の港からローマに向かって彼女は旅をするのです。だから、パウロは「この手紙を彼女が届けたなら、ローマの教会の皆さん、彼女を心から迎えてほしい」と言います。

### (1) キリスト者にふさわしい歓迎の仕方：キリストの愛をもって

その歓迎の仕方もパウロはここに記しています。「**聖徒にふさわしいしかたで、主にあってこの人を歓迎し、**」とあります。パウロは、ただ何となく迎えるのではなく、クリスチャンにふさわしい歓迎の仕方、別の言い方をすれば、キリストの愛をもって彼女を迎えてあげてくださいと願うのです。敢えて、パウロはこのようにローマの教会に勧めたのですが、恐らく、そのような勧めがなくても、ローマのクリスチャンたちはそのようにして彼女を迎えたことでしょう。なぜなら、クリスチャンとはそのような者たちだからです。私たちのところに来る宣教師たちに対して皆さんはそのようにしてくださっています。ある人はその人たちを自宅に招いて食事をともにしましょうと、その人たちとの交わりを大切に思っておられます。ときに、宣教師の話聞いて、その人たちの必要に物質的に応えようとする。喜んで彼らのために犠牲を払いたい、なぜなら、私たちは家族だからと。ある人はそのような人たちのために祈ろうとします。祈りをもって彼らの働きを支えサポートしたいという願いがあるからです。ですから、クリスチャンとして、主を愛する者として、兄弟姉妹として人々を歓迎しようとする。パウロは書く必要がなかったのに、敢えてそのことを記しています。

**(2) 助けてあげて：**もう一つ、2節に「**あなたがたの助けを必要とすることは、どんなことでも助けてあげてください。**」とあります。彼女がローマに来たときにはいろいろな必要があるだろう、助けを必要とするかもしれない、そのときにはぜひそれらに答えてあげてほしいと、このこともわざわざ言う必要はなかったのです。なぜなら、このこともクリスチャンたちはそのように互いに助け合う者だからです。しかし、いずれにせよ、パウロが非常に愛したこのフィベが大切な手紙をもってローマに行ってくれるから、彼女を心から信仰者として愛する者として迎えてあげてくださいと、それがパウロがここで彼女のためにローマの教会の皆さんに求めたことです。すばらしい信仰者フィベ。

## **2. プリスカとアクラ 3-5節**

二人目と三人目の人たちが3節から5節に記されています。「**キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによく伝えてください。**」、別の箇所では「プリスキラ」とありますが同じ人です。彼はユダヤ人クリスチャンでした。ユダヤ人ですが、イエス・キリストの救いに与っていた者たちでした。3節を見ると「**キリスト・イエスにあって私の同労者である**」とパウロは紹介します。「**同労者**」、「私を助けてくれる者、ともに働きを為す者」と彼らはまさにそのような働き人として働きを為したのです。実は、彼らのことはローマ書の前の使徒の働き18章に出て来ます。18:2を見ると「**ここで、アクラというポイント生まれのユダヤ人およびその妻プリスキラに出会った。クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリアから来ていたのである。パウロはふたりのところに行き、**」と記さ

れています。この夫婦、プリスキラとアクラはローマに住んでいたのです。そして、使徒18:2に書かれているように、クラウデオ帝がユダヤ人をローマから追い出したのですが、実際にこのことが起こったのは紀元52年です。その時にローマに住んでいたこの夫妻はそこからコリントへと移り住むのです。そして、パウロがコリントへ伝道に行った時に彼らに出会い彼らの家に滞在することになります。そのことが使徒の働き18章に記されています。後に、パウロはこのコリントを出てエペソへと移動して行きますが、その時にこの二人もパウロといっしょにエペソへと移って行くのです。そのことは同じ使徒18:18に記されています。「**パウロは、なお長らく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリアへ向けて出帆した。プリスキラとアクラも同行した。パウロは一つの誓願を立てていたもので、ケンクレヤで髪をそった。**」と誓願を立てるのです。そこから彼らはエペソへと移動して行くのですが、その時にこの二人も同行したのです。ですから、確かにパウロが言うように、この二人はパウロの同労者でした。

また、もう一度ローマ書に戻って、パウロはこの二人に関してこんなことを言っています。4節「**この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。**」。とあります。恐らく、エペソでの出来事にパウロは触れているのでしょう。彼らはパウロのためにエペソにおいていのちの危険を犯したのですが、そのことは使徒19章に記されています。また、もう一つ挙げるなら、「**この人たちに、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。**」とあります。なぜ、パウロだけでなく、異邦人の多くの教会が彼らに感謝をしたのか、それは彼らがすばらしい働きをしたからです。そのヒントが5節に書かれています。「**またその家の教会によろしく伝えてください。**」と。つまり、この二人は行くところ行くところで自分の家庭を開放したのです。そこでクリスチャンたちがともに集まってみことばを学んだり礼拝をしたのです。そして、今彼らはローマにいますが、ローマでも同じことをしているのです。自分の家を開放しそこでクリスチャンたちが集まって礼拝をもっていたのです。

彼らはこのような働きを至るところでしています。コリントにいた時もそうでした。そして、エペソにいた時もそうだったのです。アレキサンドリヤ生まれの雄弁なアポロというユダヤ人がエペソにやって来た時のことです。彼は聖書に通じていたのですが、「**この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。**」（使徒18：25）と記されています。このアポロは会堂で大胆に話し始めていくのですが、「**...それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明した。**」と続く26節に記されています。この夫婦は行くところ行くところで自分の家庭を用いて、このように多くの人々にみことばを伝えたのです。また、みことばを教えたのです。こういう働きに彼らは大いに用いられたのです。このアポロというすばらしい信仰者もこのふたりによって大切なことを教えられるのです。なぜ、そのようなことができたのでしょうか？彼らはパウロといっしょにいてしっかりとみことばを学んだからです。学んだことを他の人たちに伝えていったのです。そうして神の真理が伝わっていったのです。このような人々が今はローマにいます。パウロは彼らにくれぐれもよろしく伝えてほしいと言います。パウロの愛する者たちです。パウロの同労者たちです。パウロと同じように主を愛し主に従い続けている人たちです。パウロはローマで彼らに出会うことをどれ程楽しみにしていたでしょう？そのことはこのことばの中にも私たちは見て取ることができます。

さて、今三人を見て来ましたが、この後24名の名前が挙がっています。どんな人たちだったのか――ここに記されているのはごくわずかな情報でしかなくて、私たちは彼らがどういう人々であったのか詳しく知ることはできません。でも、その当時実在した人物の歴史が残っています。そういうものからもしかするとこのような人物であったかもしれないという推測を為すこともできます。それらを紹介しながら、簡単に皆さんと見て行きたいと思えます。

### 3. エパネト 5節

4番目に出て来る人物は5節に出て来るエパネトです。5節に「**私の愛するエパネトによろしく。この人はアジアでキリストを信じた最初の人です。**」とあります。パウロはこの人物のことを非常に愛していると言います。その理由がここに記されています。パウロの伝道を通して最初に信仰に至った人物だと記しています。ゆえに、彼のことをよく覚えていたのでしょう。そして、今この人物はローマ教会にあって主に仕えているのです。パウロにとってこのことはどれ程大きな喜びだったでしょう。信仰を持った人が成長していく、それがパウロの喜びであったエパネトです。

### 4. マリヤ 6節

5番目は6節に出て来ます。「**あなたがたのために非常に労苦したマリヤによろしく。**」と、マリヤという女性の名前がここに記されています。でも、このみことばを見ると、彼女のことをパウロ自身余りよ

く知りません。ですから、多分彼女に直接会ったことがないのかもしれませんが。第三者を通して彼女の信仰を聞いていたのかもしれませんが。しかし、少なくともパウロが言っていることは、この女性は素晴らしい信仰の持ち主であるということです。それは「非常に労苦した」ということばに表われています。これは「消耗するまで労すること」という意味です。このことばは後に出て来るのでもう少し説明しますが、この人は神のために一生懸命働いたと言うのです。パウロは彼女のことを聞き、彼女にもよろしく伝えてほしいと、そのようなあいさつを記すのです。

## 5. アンドロニコとユニアス 7節

6番目と7番目の人物は7節に出て来ます。「私の同国人で私といっしょに投獄されたことのある、アンドロニコとユニアスにもよろしく。この人々は使徒たちの間によく知られている人々で、また私より先にキリストにある者となったのです。」と「アンドロニコとユニアス」という二人の人物の名が出て来ます。このユニアスという名前を見ると、男性であるとも取れるし女性であったとも取れるのです。ということから、ひょっとしたらこれは女性だったかもしれない。もし、女性なら、彼らは夫婦であった可能性が高いと言えます。この二人についてパウロは四つのことを教えています。

- ・「私の同国人」：「私の同国人」、つまり、彼らはユダヤ人だと言っているのです。
- ・「私といっしょに投獄されたことのある、」：パウロと同じように、また、パウロとともに信仰ゆえに迫害を受け、投獄された経験を持っていると言います。
- ・「この人々は使徒たちの間によく知られている人々」：彼らは何を知られていたのでしょうか？この二人の信仰です。この二人がどのような信仰者であったかということです。素晴らしい信仰者であったこと、彼らは主を第一にして歩んでいた、そのことをパウロは知り、そして、パウロだけではなくて他の使徒たちもそのことを知っていた。教会のリーダーたちが知っていたのです。なぜ、パウロがそのことを知ったのか、なぜ、パウロがこの人たちは本当に素晴らしい信仰者だということを知ったのか？答えがあります。「私といっしょに投獄された」、つまり、パウロは彼らと時間を取ったのです。ともに時間を過ごすことによって、彼らがどういう人たちであるかがよく分かったのです。何を言うのかではなくどのように生きているのか、それを見たパウロは、本当に彼らは主を第一にして生きていることを知りました。それが証拠に、彼らは喜んでキリストのために迫害を受けようとしたのです。その結果、投獄されたのです。彼らの信仰は確かに本物である、主を第一にしていると。パウロが他の人たちにその話をしたのかどうかは定かではありませんが、使徒たちの間で彼らの信仰が話題に上っていたのです。それ程素晴らしい信仰者だったのです。このような夫婦が存在したことをパウロはこの挨拶の中で教えています。
- ・「また私より先にキリストにある者となったのです。」：そして、四つ目に彼らに関してパウロが言うことは7節の最後「また私より先にキリストにある者となった」、つまり、パウロよりも早く彼らはイエスを信じたと言っています。パウロの信仰に彼らがどのように影響を及ぼしたのかは分かりませんが、少なくとも、パウロは彼らが信仰に入ったのは自分よりも先であったということを知っていました。「アンドロニコとユニアス」はこのような二人でした。

## 6. アムプリアト 8節

8節には8人目が出て来ます。「主にあって私の愛するアムプリアトによろしく。」、この人物に関してパウロは「私の愛する」と言っています。この人は奴隷であった可能性が非常に高いのです。最初にも話したように、その当時、どういう人々が存在したかという歴史的な事実があります。バークレーという神学者は特にそのことを明らかにして、非常におもしろい説明を加えているので、皆さんにも幾つかご紹介をしたいと思います。このアムプリアトに関してバークレーはこう言うのです。クリスチャンのカ

タコム、つまり、今ローマに行くと地下墓地がたくさんあります。それをカタコムと言うのですが、クリスチアンのカタコム、クリスチアンの墓地の初期のものであったドラティマノ墓地には「アムプリアト」という名が記された墓石がある。しかも、その名前が肉太の飾り文字で刻まれていると言うのです。どういう意味なのか後で説明しますが、その名しか出て来ないのです。実は、その当時のローマ人には名前が三つあったのです。それぞれが属していた部族の族名と、彼らの第一名と家名、その三つの名前がありました。それらが記されているはずなのに、この人物に関しては一つしかない。そこから彼が奴隷であったのであろうと言われるわけです。

先ほども話したようにこの肉太の文字というのは何を意味するのかというと、彼が教会において重要視された人物であったことを表わしているとバークレーは言います。だから、敢えて肉太の字で書いたと。もちろん、このドラティマノ墓地にある墓に納められているアムプリアトとパウロがあいさつを送ったアムプリアトが同じ人物なのかどうかは分かりません。ただ、その時代にそこにいた人物のその墓が残っていて、その人物が教会にあって大変すばらしい働きをしていたということを見た時に、ひょっとしたらパウロが挨拶を送ったこの人物ではないかと言うことができるわけです。もし、そうだとすれば、この人物は教会にあってすばらしい働きをし、それは教会が認めて、奴隷であったけれども、そのような肉太の文字で名前を記していたということです。

## 7. ウルバノとスタキス 9節

9番目と10番目の人物は9節に出て来ます。「**キリストにあって私たちの同労者であるウルバノと、私の愛するスタキスと**によるしく。」と書かれています。ウルバノには「私たちの同労者」とあり、スタキスには「私の愛する」と書かれています。この名前を見ると、ウルバノとはローマにおける一般的な名前だったのです。それから、恐らく、この人はローマ市民ではなかったかと言われます。また、このスタキスはローマ市民ではなくてギリシャ人であった可能性が高いのです。それ位しか私たちは情報を得ることはできないのです。どのような人たちでどういうことをしたのかよく分からないのですが、少なくとも、パウロはこの人たちに挨拶を送っているのです。

## 8. アペレとアリストブロの家の人たち 10節

10節には二人の人物の名前が出て来ます。「**キリストにあって練達したアペレ**によるしく。アリストブロの家の人たちによるしく。」と。アペレという人に関してパウロは「**キリストにあって練達した**」と記しています。この「**練達**」ということばも「認められた、承認された、優れた、聖い」という意味があります。恐らく、この人物は様々な試練を通してその信仰が試されたのです。彼の持っている信仰の純粋さがそのような試練を通して示された。それを知ったパウロはこの人物に挨拶を送りたかったのです。大変な試練を通ったのかもしれませんが。大変な迫害があったのかもしれない。しかし、それらを通して彼が本当に主によって救われ、主を愛していることが明らかにされたと、パウロはこのように「**練達したアペレ**」と記しているのです。

次に「**アリストブロの家の人たちによるしく。**」とあります。アリストブロ個人に対するあいさつはないのです。その家の人に対するあいさつが書かれています。どうして個人的なあいさつがないのか？恐らく、この人は信仰者ではなかったからでしょう。そのように言えます。先ほどからご紹介しているバークレーも、また、マッカーサー先生も神学者ライトフットのコメントを引用しながらこのように言っています。「その当時、ローマにはアリストブロという名のヘロデ大王の孫が長い間住んでいた。」と。そういう名前のヘロデ大王の孫がいたと言うのです。それと同じ人物かどうか分からないのですが、見ていただくとパウロはここで「**アリストブロの家の人たちによるしく。**」と書いています。この「家の人」とはローマでは家族とか人間関係だけを描写するのではなくて、その家の召使とか奴隷とか

世帯全部を指すことばとして使われたのです。なぜ、そのようなことばを今紹介しているのかというと、その当時、この社会にあって、奴隷は人間として認められていませんでした。ただの物であり所有物であったのです。でも、パウロは敢えて「家の人」ということばを使うことによって、そのような奴隷もすべて含んで話しているのです。ですから、この人物の家にはたくさんの奴隷がいた、ということは非常に裕福な人物だったのではないか？そのような人物は後にも出て来ますが、このようなことから、ここに記されているアリストブロとはヘロデ大王の孫ではなかったのか？そして、この人物は最後の最後まで信仰に至ることはなかったが、彼の家にいるたくさんの奴隷たちが信仰に至った。そこでパウロはその奴隷たちに対して挨拶を送っているわけです。

## 9. ヘロデオンの家 11 a 節

13番目は11節に出て来ます。「私の同国人ヘロデオンによろしく。」と、これも私たちが名前から推測できるのは、この人物がヘロデの家族か、また、ヘロデの家の者であった可能性があります。だから、ヘロデオンと言っているのです。ヘロデの家族と何か関係していた人物であろうと。ひょっとしたら彼も自由になった奴隷であった可能性が高いです。

## 10. ナルキソの家の主にある人たち 11 b 節

そして、14番目の人物は同じ11節の後半に出て来ますが、「ナルキソの家の主にある人たちによろしく。」と書かれています。このナルキソという人物です。この人物に関してもこのようなことがパークレー、また、マッカーサー先生の本の中に記されています。「この名は普通の名である。しかし、最も有名なナルキソはローマ皇帝クラウディウスの秘書であった人で、皇帝に悪名高い影響を与え、奴隷から解放された自由民であった。彼は自分の地位を利用して賄賂で財産を作った。クラウディオ帝が殺害され、ネロが王位に就いた後、ナルキソは自殺を図った。」と。このような歴史的な人物がいるのです。パウロが「ナルキソの家の主にある人たちによろしく。」と言ったこのナルキソが同じ人物であった可能性があります。もしそうなら、先ほど見たように、彼も非常に裕福だったから、彼の家にはたくさんの奴隷たちがいたのです。パウロはその奴隷たちの中に信仰を持った者たちがいるから、その者たちによろしく伝えてほしいと言うのです。

## 11. ツルパナとツルポサとペルシス 12 節

12節に進んで行きましょう。「主にあって労している、ツルパナとツルポサによろしく。主にあって非常に労苦した愛するペルシスによろしく。」と三人の人物がここに挙がっています。この三人とも女性です。見ていただきますと「労している」ということばが何度も出て来ます。6節のマリアのところと同じ「労している」ということばの意味を説明をしました。この12節で三人の姉妹たちに対してパウロが言っているのは「主にあって労している」、「主にあって非常に労苦した」で、三人に共通していることがあるのです。それは「彼らは大変熱心に主に仕えた姉妹たちだった。」ということです。この「労した」ということばは「疲れ果てる」という意味があります。「消耗するまでに労苦すること、自分の持てるすべてのものをその働きにささげること、力の限りに働いていること」を意味します。あらん限りの力を用いて彼らは主に仕えていたのです。そのような人たちであったことが、パウロのメッセージの中に見て取ることができます。三人のすばらしい女性たちがこのローマの教会にいたと、そのことをパウロは記しています。

## 12. ルポス 13 節

18番目は13節です。ルポスという人物です。「主にあって選ばれた人ルポスによろしく。また彼と私の母によろしく。」とあります。このルポスとはだれか？マルコ15章のイエスの十字架のシーンに実はこの名前が出て来るのです。イエス・キリストが十字架を背負ってゴルゴダへと向かっている時に、あ

る人に無理矢理十字架を負わせました？その人の名は何でしたか？シモンという名前でした。クレネ人シモンでした。このシモンには子どもがいたのです。そのことをマルコ15：21のみことばが教えます。「そこへ、アレキサンデルとルポスとの父で、シモンというクレネ人が、いなかから出て来て通りかかったので、彼らはイエスの十字架を、むりやりに彼に背負わせた。」とあり「ルポス」という名前が出ています。イエスの十字架を無理矢理背負わされたシモンの子どものひとりがルポスであったと言うのです。パウロはここで「彼と私との母によろしく。」と書いています。ルポスの母がパウロの母であったということを行っているわけではありません。彼の母親に対して、まさにそのように親しい思いを表わすのです。というのは、このルポスに母親は大変な影響を与えたのです。すばらしい働きをしたのです。それを知って、パウロはこのように彼の母にもよろしく伝えてほしいと言うのです。

### 13. アスクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマス 14節

そして、14節には5人の名前が出て来ます。「アスクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよびその人たちといっしょにいる兄弟たちによろしく。」とこれしか書かれていません。でも、少なくともこれを見る時に、この人物たちと兄弟たちがいっしょにいたことが分かります。ローマの教会の中であって、恐らく、この人物は教会の中で何らかの霊的リーダー的なポジションにいたのでしょう。彼らはそのような兄弟たちを世話していたのです。もっと言えば、これらの人たちを弟子として訓練していた、その可能性があります。ですから、そのローマの教会であって、また、ローマであって、このような働きをしているリーダーたち、彼らに対してパウロは挨拶を送るわけです。

### 14. フィロロゴとユリヤ、ネレオとオルンパ 15節

そして、15節を見ると4人出て来ます。「フィロロゴとユリヤ、ネレオとその姉妹、オルンパおよびその人たちといっしょにいるすべての聖徒たちによろしく。」と。これしか書かれていないのでどういう人物であったのか私たちにはよく分からないのですが、先ほどから皆さんにご紹介しているように、このような人物が歴史上に存在したということだけは皆さんにご紹介できます。その人物はネレオです。彼に関するこのような記事が残っています。「紀元95年、ローマに衝撃を与えた事件が起こった。ローマの最も著名な二人がクリスチャンになったという理由で有罪の判決を受けた。彼らは夫婦で夫の名はフラビウス・クレメンズでローマの執政官であった。妻はドマティラで王家の血筋の者であった。彼女は前皇帝レイシスアヌスの孫であって、時の皇帝ドミティアスの姪であった。」と王室の者であったのです。この夫婦が信仰に入ったわけです。そして、その後どうなったか？「夫のフラビウスは処刑され、妻のドマティラはポンティア島へ追放された。」という記事が残っています。

なぜ、このふたりの人物を今挙げたかということ、ローマにおいて非常に著名だったこの夫妻に、だれかが福音を語っているのです。このようにパークレーの記事が続きます。「フラビウスとドマティラの侍従の名がネレオだった」と。この二人に仕えていた奴隷です。この奴隷にネレオという名前の人が存在するのです。もちろん、このネレオがパウロが挨拶を送ったネレオかどうかは分かりません。しかし、このような記述によるなら、この一人の人物が、その当時ローマで著名であった人たち、ローマの執政官でありまた王家の血筋を引くこの夫妻に福音を語り、その結果、彼らが信仰を持ち、その結果、彼らはいのちを落とし、また、島に追放されて行ったというのです。もし、パウロがここで最後に挨拶を送ったネレオがその人物だとするなら、この人は大変な人だったのです。そうでなかったとしても、このネレオという一人の奴隷が何をしたのか——。自分の主人であるこの二人にキリストの証をしたということなのです。

これが27名です。皆さんにぜひ覚えていただきたいのはこういうことです。彼らの背景はそれぞれ異なりました。ある者は教育を受けていたし、ある者は社会的に地位を得ていたし、そうでない人もい

た、ある者は人間として扱われていなかったし、ある者は非常に人々からの尊敬を博していた。だれであったとしても、彼らはイエス・キリストからの命令に対して忠実に従おうとしていたのです。彼らは出て行って、イエス・キリストのすばらしい救いのメッセージを語り続けたのです。その結果、様々な人々が同じようにこのすばらしい救いに与っていったということです。私たちが覚えなければいけないことは、パウロはこの人々を愛し彼らを尊敬したのです。なぜなら、パウロと同じように彼らはキリストの福音を誇り、キリストを誇り、そして、そのメッセージを語り続けたからです。いろいろな横文字が並んでいました。聞いたことのない名前ばかりが出て来ました。そうではなくて、実際、こういう人々が存在し、この人々はイエス・キリストの福音を伝えて行くという、大切な務めを忠実に果たしたのです。私たちが考えなければいけないのは、彼らは主にあって成長し、キリストの栄光を輝かせる者としてこの地上を歩んだということです。そのような人々が存在したということです。

あなたが考えなければいけないのはあなたの歩みです。あなたはどのように歩んでいるかです。主のみことばに忠実に従っているかどうかです。みことばの実践に励んでいるかどうかです。主の助けをいただきながら、あなたはキリストの栄光を現わすために、あなたのことばもあなたの考えもあなたの行ないもすべて委ねて、ささげて、その働きを心から望んで歩んでいるかどうかです。主が私たちに託された大切な働きは、このすばらしい救いを伝えることです。一人でも多くの人々がこの救いに与ってくださることです。

私は先週ある一人の宣教師にお会いしました。63年間、私たちの国日本人の救いのために、信仰のために生涯をささげた人です。22歳でこの国にやって来て63年間の宣教師としての生活の中で、アメリカに帰った回数は片手で数えるほどです。この国が彼の国になったのです。ベッドで横たわっている彼のもとでいろいろなお話をした中で、彼が最後におっしゃったことは「すべての造られた者に、」です。言わんとしたことは明らかでした。すべての造られた人にこの福音を語りなさいです。その神のメッセージを彼は受けて、そして、アメリカを捨てて日本にやって来て、日本人となり、そして、あの北海道を二周してすべての家々を周ってキリストを伝えたのです。東北はすべてを9回周って福音を語り続けたのです。63年間で。そのような人が今もいるのです。皆さんもそういう人になりたいと思いませんか？そんな人の中に入りたい、そんな人に私もなりたい。キリストの福音を伝え続ける人に。すべての造られた者にこの福音を届けたい。なぜなら、これしか救いの道はないからです。これしか罪が赦される道は残っていないのです。信仰者の皆さん、このメッセージを神はあなたに託してくれたのです。弱い私たちに、愚かな私たちに、そのことを知っている神はメッセージを託すだけではなくて、あなたに必要な助けを備えると言って、その助けを備えてくださったのです。どうします？皆さん。立ち止まりますか？そこに座り込みますか？それとも出て行ってこのすばらしい神の福音を伝える者として、残されている人生を歩んで行きますか？そのように生きて行きたいと思えます。そして、ここにおられる皆さんが同じように歩んでくださることを願います。このパウロの同労者たちはそのように生きたのです。そして、パウロ自身、そのように生きて、やるべきことをすべて全うして主のもとへ召されて行くのです。

## **B. 教会への挨拶 16節**

最後の16節に、このような教会への挨拶が載っています。「**あなたがたは聖なる口づけをもって互いのあいさつをかわしなさい。キリストの教会はみな、あなたがたによろしくと言っています。**」、パウロが教えたいことは、こうして兄弟姉妹が愛をもって互いに受け入れ合うことです。どういう形であるかは国によっては違います。問題は、どういう形かではなくて、どういう心をもって兄弟姉妹を迎えるかです。なぜなら、この当時クリスチャンは迫害されていたのです。もしかすると、家族からも社会からもそれ

はあったでしょう。彼らを温かく迎えてくれる場所は一つでした。教会だったのです。パウロは言うのです。そして兄弟姉妹が温かく迎え合って行きなさい。聖なる口づけをもって愛をもって互いを受け入れ合いなさいと。

そして最後に、「**キリストの教会はみな、あなたがたによろしくとっています。**」とあります。パウロが訪問したいろいろな教会がローマの教会のクリスチャンたちによろしく伝えてほしいと言うのです。パウロはそのメッセージを最後に伝えるのです。「みな祈ってる。だって私たちは家族だから。みなあなたたちのことを心配している、家族だから。」と、ローマのクリスチャンたちはこのメッセージを聞いて喜んだでしょう。そして、ローマのクリスチャンたちも周りの多くの人々のために祈ったのです。考えてみると、私たちよりも彼らのビジョンは世界的だったかもしれない。自分たちのことだけ考えているのではなくて周りの人々のこと、周りの兄弟姉妹たちのことを考えて、何ができるかを考えたのです。すばらしい教会が存在していたのです。だから、神はすばらしい働きをなさったと思いませんか？

このような歩みを見る時に私たちが考えさせられることは「私たちの教会がどうなのか？私自身どうなのか？」です。どうぞ、託されたメッセージをしっかりと携えて、主の力をいただきながらこの一週間を歩んでください。私たちには語るべきメッセージがあります。そして、そのメッセージを語るために必要を備えてくださった神が私たちとともにいてくださる。その方を信じて、信頼して、大切なメッセージをこの一週間もそれぞれのところで語り続けてください。

#### 《考えましょう》

1. パウロの同労者たちに共通した特徴は何でしたか？
2. アポロに対して、プリスカとアクラはどのような働きをしましたか？
3. その働きがどうしてもすばらしかったのか、その理由を挙げてください。